

チェ・ユリナ「『好き』を貫く」

いつか日本に戻ってくる。2008年、1年間のワーキングホリデーを終えて韓国に帰る成田空港でそう思った。しかし、次はワーキングホリデーや旅行ではなく留学だ、と一人でそう決めた。

日本に興味を持ち始めたきっかけは、写楽の歌舞伎の浮世絵に惹かれたことであった。大学生のとき、写楽の浮世絵がとても好きだった。か細い線でなぞられた輪郭、その輪郭線がとても好きだった。弱々しいが、生命力を感じる。ソウルで浮世絵の展示会が開かれると、必ず展示会場に足を運び、‘なま’の作品を鑑賞できることを喜んでいて。一つの版で何枚も制作できる版画は全て同じように見えるが、実は微妙に違う。同じ版で刷られた作品2枚を並べ、同時に見ていると、その違いがよくわかる。とても繊細で色鮮やかな作品である。浮世絵との出会いは自分の作品制作にヒントを得ることができた。

「乳白色の肌」で有名な藤田嗣治の裸婦像もいいが、ドローイングもとても好きだった。その中でも、特に猫と子どものドローイングが好きだった。生き生きした表現力やどこか漫画のような表情は親しみがあり、見ているとくすくす笑ってしまう。彼の線の使い方を研究するために、日本から分厚い画集を取り寄せて一生懸命に真似していた。

「おひとりさま」という研究テーマについて、研究を始めたきっかけやひとりの時間が好きかをよく聞かれる。生まれつき孤独を楽しむ、ひとりの時間が好きな感性の持ち主なのかもしれないが、ひとりの時間の楽しさがわかったのは、日本でのワーキングホリデーのときであった。初めての一人暮らしや海外生活は自分の思い描いたものとは違ったが、色々な人に出会い、色々なことが経験できた。

絵を描くことはもちろん好きだ。子どものころはよく塗り絵をした。描かれてある図柄を好きな色で塗り、塗り終わったら、すぐ新しい塗り絵を買いにいった。そのときは自由に描きたい放題であった。今は子どものころよりは自由ではない。ひとつひとつの過程は苦しく、自分の思う通り描けなくて、キャンバスを破りたいときもあったり、自身の力不足に情けなく絶望したりするときもあるが、それまで含めて絵を描くことが好きだ。好きだから苦しくても辛くても続けられる。

今の私は「好き」に導かれ、「好き」でできている。日本に留学して、好きな絵を描くことができ、好きなことを研究できる。浮世絵という「好き」と、藤田嗣治という「好き」が日本留学に導いてくれた。そのとき、そのときの「好き」に一生懸命に向き合って、頑張っってやっていくうちに、また新たな「好き」に出会う。その時その時の「好き」に与えられた課題をやっていくと、また新たな「好き」の課題が現れる。そうやって「好き」という点と点がつながって線になり、自分にはわからない模様をつくっていると思う。

そして、次の「好き」が現れた。韓国と日本の若手作家のための交流の場をつくることだ。現在の海外アーティストの展示は、有名な展示企画者によって選ばれた有名なアーティストの紹介という一方的な方式で、様々な問題点が指摘されてきた。韓国と日本の作家たちの交流の場をつくることによって、話し合い、同時代を生きているアートについて理解し合うことができる。そういう過程で生まれる展示では、展示企画者からの一方的な方式ではなく、アーティスト自身からの‘なま’のアートを見せ合う生き生きとした作品を見せることができると思う。まだ具体的な計画はなく、ぼんやりとしたイメージだけだが、そういう場をつくること自体が新たなアートの形になるのではないかと思っている。

今度の「好き」はどこに私を導いてくれるのか、とても楽しみである。